

資料室だより 67

Cent motets du XIIIe siecle

Pierre Aubry 編 (New York, Broude Brothers)

本科21期生の寄付により上記の楽譜を購入いたしました。どのような内容かといいますと、Bamberg, Staatliche Bibliothek が所蔵する Lit.115 (olim Ed. IV 6) という13世紀のモテトゥス100曲の写本の研究用エディションです。この写本の起源は、綴りの特徴などからして東部フランスではないかと言われています。全3巻から成り、1巻はオリオジナルのファクシミリ、2巻はその解説譜、3巻は解説および校訂報告となっています。

すべて3声部です。音楽史の本などをお読みになればわかりますが、中世のモテトゥスというのは各声部が異なったテキストを歌います。ラテン語の典礼文に俗語であるフランス語が混入し、聖俗混交を見せます。この写本ではそれほど混交はなく上2声は同じ言語であることが多く、最下声は必ずラテン語の言葉一文字だけを引き伸ばして歌うようになっています。例えば、上の声部が *Ave virgo regina* (めでたし、処女なる女王)、中声部が *Ave, plena gratie* (めでたし、恵に満ちた方) と歌います。低声部は *Fiat* (お言葉通りになりますように) という一言を引き伸ばして歌います。いわば詩によるトロープス—注釈です。低声部に *neuma* と記されていることがありますが、これは典礼に起源を持った旋律ですが、もう出典がわからなくなってしまったものを示しています。モテトゥスは典礼からできたもので、聖職者の創作でしたが、次第に貴族の手にも渡り、宮廷社会の楽しみともなっています。

中世は美しい旋律の宝庫です。こういったジャンルはあまり演奏する機会もないかと思いますが、宗教音楽史のなかに一時花咲いた、モテトゥスという楽曲にも目を向けてみてください。近代のフランス音楽にもつながる伝統を感じることができると思います。

Secular Mediaval latin song: An Anthology

The Institute of Medieval Music

中世の旋律の宝庫をもうひとつ。タイトルのとおりラテン語による非典礼歌のアンソロジーです。10世紀から13世紀くらいまでが中心になりますが、なかには有名な *O Roma nobilis* などのような巡礼歌も含まれ、非常に起源の古い旋律も入っていますので、中世の旋律構造を知る上では大変役に立ちます。

(杉本ゆり記)